文芸評論家

三宅香帆の10冊

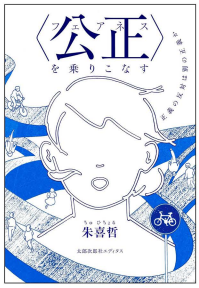
街の本屋くらい、「私的」と「公共的」を行き来する場所はないなあ、と思います。

本棚を見つめ、買いたい本を見つけるとき、私自身はたったひとりであり、そこには作者と私の関係しかありません。

しかし、本棚から目を離し、店内へ振り向いてみると、そこにはお客さんがいて、書店員さんがいて、そしてたくさんの本という社会を反映する鏡があります。

本屋が街にあるということは、自分と社会をつないでくれる場所がそこにあるということではないでしょうか。

八戸で、本屋という文化の未来について語れること、とても楽しみにしています！



01 朱喜哲

『〈公正（フェアネス）〉を乗りこなす』

太郎次郎社エディタス

社会において正しさはどう扱うべきか？ 私的な言葉で公共の正義について語ってくれる名著！

02 夏目漱石

『私の個人主義』

講談社学術文庫

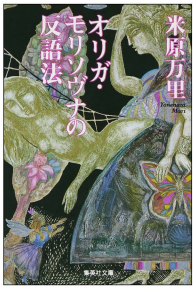
日本人は明治以降、個人主義と共同体主義をさまようことになってしまう。その予言を語った一冊。

03 カズオ・イシグロ

『遠い山なみの光』

ハヤカワｅｐｉ文庫

戦後の長崎で、日本を出る女性と出会う。日本という場所の記憶について考える時に。



04 米原万里

『オリガ・モリソヴナの反語法』

集英社文庫

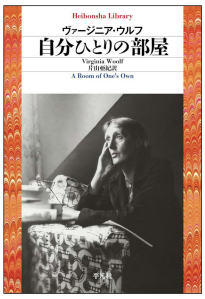
恐怖政治時代のソ連と、恩師の運命が絡み合う？ ロシアを舞台にした傑作小説。

05 上間陽子

『海をあげる』

筑摩書房

沖縄の米軍基地によって葛藤する人々の思いを言葉にした一冊。読むと、社会と個人の狭間を考える。



06 ヴァージニア・ウルフ

『自分ひとりの部屋』

平凡社ライブラリー

ひとりで読み、書くことは、女性はとくに難しい。それでも、と言いたくなる。

07 村上春樹

『ＴＶピープル』

文春文庫

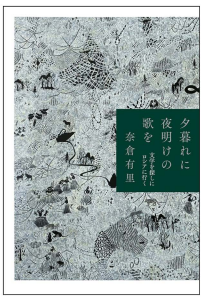
村上春樹の短編集には、孤独な人たちがたくさんいて、そこに癒されるのかもしれない、と思う。

08 逢坂冬馬

『ブレイクショットの軌跡』

早川書房

動画によってたくさんの人の顔を画面上で見られる現代であっても、それでも孤独は埋まらない。傑作エンタメ小説！

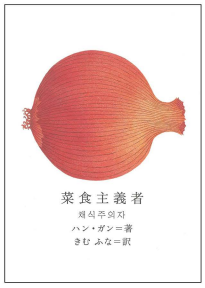


09 奈倉有里

『夕暮れに夜明けの歌を』

イースト・プレス

海外の人が書いた言葉を読むと、社会のその先にある「みんな同じ人間である」という感覚を思い出せる。ロシア翻訳家によるエッセイ集。



10 ハン・ガン

『菜食主義者』

CUON

生きづらさという言葉で抱えきれないものを、言葉は抱えこんでくれる、と伝えてくれる小説。

朱喜哲の10冊

本はひとを「自分自身」にしてくれるもの。

三宅香帆さんはベストセラー『なぜ働いていると本が読めなくなるのか』でそう書かれていました。本は、本と向き合うことは、読者を孤独にしてくれるのだと。

よくわかります。でも同時に、次のようにも言えるはずです。

本は、孤独な私と世界をつないでくれるものでもある、と。

街の本屋は、そこに並ぶ本たちは、自分をただの「私」にしてくれる私的なものであり、同時にそういう存在としての「私たち」を立ち上げてくれる公共的なものでもあります。

私的なものと公共的なもの。そのあいだにある、あるいはそれらを媒介する、本と本屋について、その文化の未来について、いっしょに話せたらと思います。

01 向坂くじら／柳原浩紀

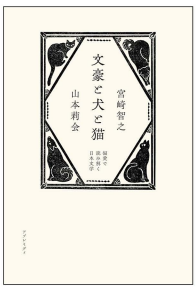
『群れから逸れて生きるための自学自習法』
明石書店

本書は「勉強とは孤独になるためのもの」と説く。その声は『なぜ働』とも共振する。

02 向坂くじら

『踊れ、愛より痛いほうへ』
河出書房新社

「勉強」を勤める詩人にして作家はみずからなにを書くのか。表現形態は違えど通じる「私自身である」ことへの希求。第173回芥川賞候補作。



03 宮崎智之／山本莉会

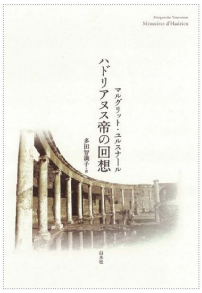
『文豪と犬と猫』
Après-midi

では作家たちはどのように書いたのか。「同居する動物」に光を当てることで浮かび上がる作家の孤独と社交。

04 飯塚理恵

『３５歳の哲学者、遺伝性がんを生きる』
幻冬舎

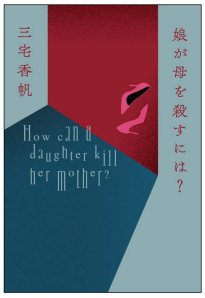
哲学もまた、ひとを孤独にしてくれる。それは人生に困難が訪れたときに発露されるなにかでもある。そのドキュメント。



05 マルグリット・ユルスナール

『ハドリアヌス帝の回想』
白水社

ひとりの人生が、そのまま一冊の本になる。それはしかも虚構として。皇帝と作家と詩人兼翻訳家。偉大な魂たちが響きあうとき、もっとも私的なものが公刊物となる。



06 三宅香帆

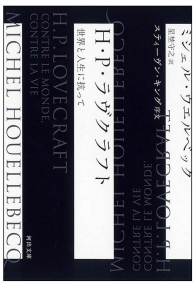
『娘が母を殺すには？』
PLANETS／第二次惑星開発委員会

なぜ三宅香帆は「読書」を勧めるのだろう。そのモチベーションの淵源のひとつが、きっとここにはある。そして、そこには私心がない。

07 よしながふみ

『愛すべき娘たち』
白泉社

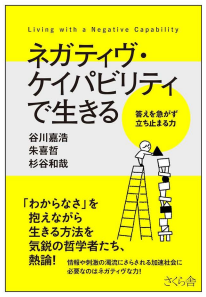
「母もまたひとりの娘である」。そのことを知るために、私たちは本を読み、人生を学ぶのかもしれない。⑥でも言及される傑作漫画。



08 ミシェル・ウエルベック

『Ｈ・Ｐ・ラヴクラフト』
河出文庫

世界と人生に抗うことは、それらを希求することでもある。もっとも厭世的で冒涜的な「正しくない」作家同士の共鳴。



09 谷川嘉浩／朱喜哲／杉谷和哉

『ネガティヴ・ケイパビリティで生きる』
さくら舎

学問を修めることも「孤独になる」作業である。孤独な研究者同士が、だからこそ続けられる終わらない会話の記録。

10 中井英夫

『虚無への供物』上・下　新装版
講談社文庫

創作は否応なく起こる現実に捧げる供物で、祈りでもある。あまりに私的な哀しみを公共的なものにするために。洞爺丸が沈んだ9月末の青森に、本書を奉じる。